

遊山箱（木製弁当箱）

徳島では、漆塗りの三段重の木製弁当箱（遊山箱）が幼少期の定番でした。子供たちは、友達と一緒に野原、山、またはビーチに行ったとき、カラフルな弁当を持って行きました。1960年代以降、遊山箱は日常生活であまり使用されなくなりましたが、近年の研究者や職人の努力により、再び注目されるようになりました。

子供の頃の伝統

遊山箱は、箱型の枠に収まる小さな四角いスタッキングトレイを3枚セットにしたものです。蓋は上下にスライドすることで、トレイをしっかりと固定します。食事の時間になると、蓋を引き上げて中のトレイが出てきます。上部には取っ手が付いていて、全体を持ち運ぶことができます。

遊山箱の下段には、お寿司や、揚げ豆腐のポケットにご飯を詰めた甘辛いいなり寿司等のご飯ものが入っているのが一般的です。真ん中の段には煮物が入っており、上の段には甘いものを入れていました。徳島の子どもたちに特に人気があったのが、米粉と砂糖で作った「ういろ」という蒸し菓子でした。

遊山箱の伝統は、徳島の農業遺産にルーツがあります。多くの人が農村地帯で暮らしていた頃は、季節を中心とした生活が営まれていました。春の訪れを祝うために、珍めったにない休日を利用して、村人たちは屋外でピクニックを楽しんでいました。

遊山箱のデザインは、家族全員の食べ物を運ぶために設計された大きめの三段箱から発展しました。子供向けの小さいバージョンは、おそらく江戸時代の終わり頃（1603～1868）に登場しました。明治時代（1868年～1912年）には、彩色された遊山箱が人気を博し、ひなまつり（the Doll's Festival）と関連する様になりました。

徳島では、春の風物詩として、女の子も男の子も友達と集まってピクニックランチをしていました。ご年配の方の多くは、子供の頃の遊山箱の思い出や、学校の友達との遠足の思い出が残っている方も多いようです。一般的に小学生の子供は自分用の遊山箱を持っていて、毎年この日のためだけに出していたのが一般的でした。

第二次世界大戦後の景気拡大期には、家庭の小規模化や農業から他の仕事への移行が進むにつれ、遊山箱の需要は減少し、職人の数も減少していきました。

現代の遊山箱

食文化関連の学者で研究者でもある三宅正弘氏が 2006 年に出版した本が、遊山箱の伝統を復活させるきっかけとなりました。三宅氏は、地元の職人と協力して、よりシンプルで安価な遊山箱を開発しました。それ以来、遊山箱の絵付け体験は、家族連れや学校のグループ、また徳島のお土産を求める観光客に人気の活動となりました。

伝統的な漆塗りの遊山箱は、花嫁への特別なプレゼントや出産祝いとして購入することもできます。お弁当箱は、装飾用に使用したり、お菓子やアクセサリーなどを入れて飾ったりすることもあります。また、歴史や食文化に関心のある団体が、徳島の子どもの時代の文化を知ってもらうために講演会やイベントを開催しています。